

大田信良 著

『帝国の文化とリベラル・イングランド
——戦間期イギリスのモダニティ』

いまから十年後、あるいは五年後でも良いのだが、どのように受け入れられているかを想像する。この本が、そのとき、ごく当たり前の本になっていれば良いと思う。「ああ、『帝国の文化とリベラル・イングランド』ね。立派な本だけど、あそこに書いてあることは、だいたいもう分かってるよね」というような。

大学に勤める研究者とはどのような論文を書くべきなのかを、ときどき考える。紹介文や随筆ではなく、一応は、専門家が書いた論考であること。印象を述べたり推薦をするのではなく、学術的に正しい分析を目標とすること。その学術上の貢献が、しかし、できるかぎり多くの読者に開かれていること。公平でありながらチャーミングであること。もちろんそれは簡単なことではないし、あるいは、不可能なのかもしれないが。

けれど——完全にそれが成功しているとまでは言わないにし

ても——このようなことを考えさせ、そのようなところに向かわせようとするだけの力が、この本にはあると思う。その意味において、きわめて重要な一冊である。

私はアメリカ文学の研究者なので、本書の細部については、正直に言えば、分からない部分も少なからずある。しかし、全体として、引き込まれるように面白く読んだし、そして、読後の感想は、非常に勇気づけられるものであった。

基本的には、Virginia WoolfとD.H. Lawrenceについての論考集であり、題にもあるように、この二人の作品を、二十世紀初頭の大英帝国の文化と、その大英帝国の文化への批判として現れた新しいリベラリズムの文化との関係のなかで分析しようという試みである。Fredric Jamesonの“Modernism and Imperialism”があり、それを批判的に展開した試みとしてJed Estyの*A Shrinking Island*があつて、その系譜に連なる試みと言えれば良いかもしれない。

面目躍如たる点は、けれども、先行研究をどれだけみごとに消化しているかにあるわけではない。注や最後に付されたリーディング・リストに筆者の博学を辿ることはできるが、それを言うならば、全体としてより細密で整理された批評枠の見取り図を提出することも可能なはずと批評することはできるだろう。

重要なのは、ここに収められた論中一貫している、筆者の立ち位置なのである。

当時の政治のあり方や小説以外の知識人の著作やいわゆる大衆小説までもが重要なサブテキストとして参照されるこの本の

アプローチは、いわゆる新歴史主義的なものである。かつての新批評的な手続きに代表される、いわゆる精読の読解とは、大きく異なっている。

そんなことはそもそも題を見れば分かるわけだが、しかし他方、これはいわゆる政治的な読みだろうか？ この本を読んでみて、逆説的にわれわれが気付くのは、二十世紀終盤以降の英米文学研究における「政治的な読み」とは、基本的に、書き手のアイデンティティもしくは党派性を明確に打ち出し、自身の個別具体的な立場からの解釈を、無視しえない新読解として提出するものだった。そして、この本の筆者の立場は、そのようなものから大きく隔たっている。

美学的な批評でも、政治的な批評でもない。誤解を招く言い方をすれば、たとえば、「帝国の文化」を題材にしながら、この本は帝国主義を批判することをその目標としていない。この本で批判されているのは、それよりもまず、帝国主義の文脈を知らずに、当時の小説を読解しようという無謀な試みである。

ここにある種の教養主義、あるいは教養主義の復活の希求を見ることも可能かもしれない。本書の筆者にとって重要なのは、「よく知り分かる」ことである。

美学的でも、政治的でもなく、ここにあるのは、ただの批評なのだ。それは、「知」によって党派性を越えようという、古くからの試みである。そしてまた、批評は、もちろん、文学とはどのようなものであったのか、そして、ありえるのかを考えている。

われわれはみなそれを求めているし、そのようなものを求めてきたのではないか。Aimé Césaire を引用する C.L.R. James

を引用して Said が言う「あるのは、すべての者の集う、勝利の会合の場なのである」とはそういうことではないだろうか。

この本の出現には、大きく勇気づけられた。それは、この本を通じて、われわれの職業人としての営みとはどのようなものであるべきかをもう一度確認できたからである。このような立ち位置からの批評がひとつの基準となるように、とりわけ、大学院生のような若い世代の人に読んでもらいたいと思う。(慶應義塾大学出版会、2010年9月、A5判 262頁、2,500円)

——三浦 玲一 (一橋大学教授)